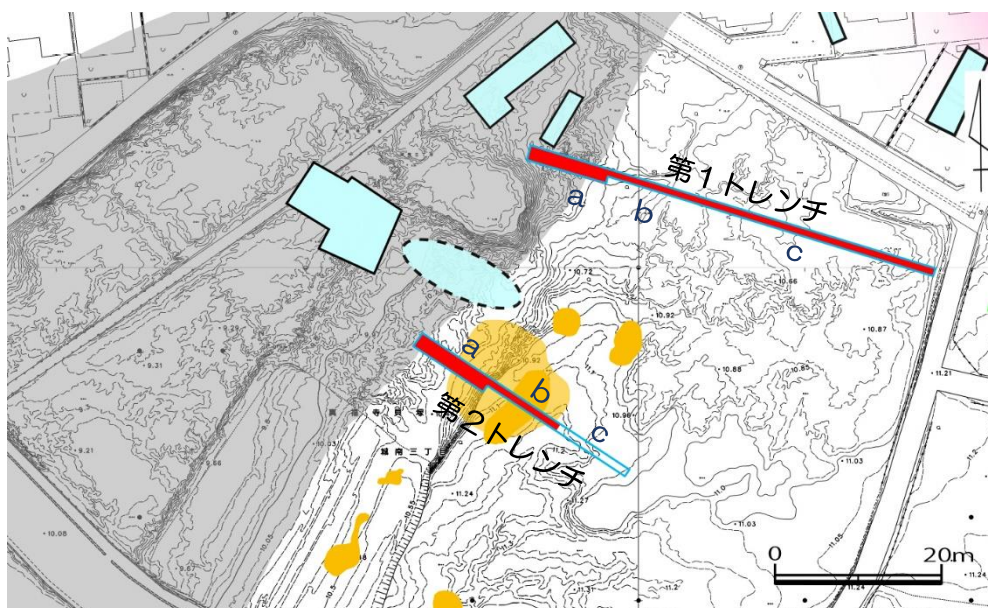


令和2年（2020）

■ 11月30日（月）

11月28日（土）、午前と午後の2回、発掘調査の最前線をみなさまに直接ご覧いただく現地見学会を開催しました。あいにくの冷たい風が吹きすさぶ寒い日でしたが、普段静かな発掘調査現場が熱気に包まれた一日となりました。大勢の方々にお越しいただき、調査の最前線にふれ、真福寺貝塚の価値と魅力を感じていただいたことに感謝申し上げます。

にぎわいが去った発掘調査現場では、今年度分の調査の完了に向けて作業が進んでいます。昨年度までの調査で、おぼろげながら存在を感じさせた「高まり」の北側部分も、次第にはっきりとした姿を現してきています。さらに、今年度の「窪地」の調査は終盤を迎えています。



11月は現地見学会以外にも大にぎわい（左：小学生体験発掘調査 右：和光市「国指定史跡午王山（ごぼうやま）遺跡」保存活用計画策定委員会の皆様の視察）

令和2年（2020）

### ①第1トレンチの調査

北側の第1トレンチでは、大きく三つの部分に分かれることがはっきりしてきました。西側から順に、a、b、cと仮に区分して紹介します。なお、その境目は截然と分かれるわけではありません。



#### a 谷（泥炭層遺跡）際

≫写真1 出土したミミズク土偶の頭部

西側の谷へと落ち込む斜面部分です。現在の地表面を覆う表土を取り除き、調査を進めてきました。西端は湧水がひかず、調査を見合わせていましたが、冬場が近づいて地下水位が下がったせいか、遺跡の土層が再び姿を現しました。

斜面は、厚い土層が幾重にも折り重なって形成されていることがわかってきました。しかも、その土層は、東側の「高まり」から西側の谷へと傾斜しています。これまでも紹介してきたように、黄褐色の土層と、土器や炭になった小さな木片などをたくさん含む土の層とが、互い違いに積み重なっている様子も見られます。考古学の教科書どおり、下の層ほど古い時期の土器、上になるほど新しくなります。そして、欠損部分も多いものの、赤色の彩色がよく残るミミズク土偶の頭部も出土しました（写真1）。



谷のほとりでは、縄文時代後期末葉安行2式から晩期前葉安行3a式・3b式までの斜

≫写真2 斜面堆積

令和2年（2020）

面堆積層を調査しています（写真2）。黄褐色土層の下から安行 3b 式の土器を多量に伴う暗褐色土層も検出しました（写真3）。

そのあたりから8mほど東側では、安行 2 式の斜面堆積層を調査しています（写真4～

6）。現在の調査面は地表下 110 cmほどですが、検土杖により地山までまだ約 100 cmあることを確認しています。

安行 2 式の調査面からさらに 5m 東側では、安行 1 式の土層の下から、後期中葉加曾利 B1 式の大形個体を検出しました（写真7）。これより東側ではローム層を検出してお



≫写真3 安行 3b 式の土器を多量に伴う暗褐色土層



≫写真4 安行 2 式の層を調査



≫写真5 土器の集積

令和2年（2020）



≫写真6 大型の土器破片

り、本地点周辺のみ暗褐色土が堆積していることから、住居跡ないし、土坑に伴うものと思われる。

なお、本地点が本来の谷の縁辺部に相当するものと考えています。

#### b 「高まり」

aと次のcの調査の進展によって、この部分が「高まり」であることが明確になってきています。

#### c 「窪地」

bの東の「窪地」では、地盤の関東ローム層まで調査が進みました。写真8は、谷際から高まり方向に向かって撮影したのですが、現在の地表面の傾斜とは逆方向にローム層が傾斜している様子が観察できます。



≫写真7 加曾利 B1 式の大形個体



≫写真8 窪地内

令和2年（2020）

## ②第2トレンチの調査

南側の第2トレンチでも、同じように三つの部分に分かれています。調査は主に谷際で行い、ほぼ完掘した「窪地」では、検出遺構の見直しなどを進めました。

### a 谷（泥炭層遺跡）際

後期後葉安行 1～2 式の斜面堆積層を調査しています。後期中葉の貝層やその上に堆積する複数枚の土層が観察可能な状態となっています（写真9）。



≫写真9 トウのようなしま模様の斜面堆積

### c 「窪地」

過日調査した窪地内の土坑について、再度遺構確認を行い、完掘しました。やや大形の土器片も出土しています（写真10）。本土坑は、平成29年度に史跡東側調査区の窪地内で検出した墓壇と思われる土坑と、規模や形状、また窪地の縁辺部に位置するという点で良く似ています。



≫写真10 窪地縁辺の土坑